

宮城県 南三陸町を訪れて

(2011.8. 11～15)

朱い実保育園 澤田 絵美

3月11日のあり得ない映像が頭から離れず、今の自分に何かできないか？現場はどうなっているのか？この目で見てみたいという思いが、保問研で実現したことに感謝します。また、一緒に現地入りしてくれた仲間にも感謝します。受け入れてもらったホテル観洋・託児所マリパル・志津川保育園にも感謝をします。5日間という短い期間でしたが、一つ一つの言葉や、見たものに対して、これからどう向き合っていくのか、考える機会になりました。期間中は一つもこぼさないように、忘れないようにと必死でしたが、帰ってから文字にすると、感情があふれてきます。見聞きしてきたことをたくさんの人に伝えながら、自分の中でも消化し、次へ進めたらいいなと思います。

初日はタクシーで南三陸町の町をぐるりと回り、志津川保育園にお邪魔しました。自分の前にあるものが、テレビでの映像なのか、現実なのか…分からなくなるくらい、受け止めるのに時間がかかります。急な坂を登りきったところにある保育園ですら、園庭1メートル、園舎50センチもの津波が襲ってきたそうです。

体験したことのないほどの揺れで、すぐに危険を感じ、子どもたちを着替えさせながら、あるものに水を溜め、子どもたちを裏山から小学校の方に避難させ、真っ暗で寒い夜、たき火をして一晩過ごしたそうです。木もなくなり、さすがに2晩は過ごせず、『また襲ってくるかもしれない…』という不安を抱えて下りたそうです。

どこに逃げるか、次の行動はどうするのか…何も情報がない中、判断するのはものすごく怖かっただろうと思います。それでも、とっさの判断で水を溜めたことが、後々飲み水として役立ったそうで、すごい判断力だなあと感心しました。

保育園でも避難用の荷物を作っておく必要があると思いました。意外にも紙と書くものがなくて困ったそうです。誰をどこで誰に引き渡したのか、何人がどこでどうしたのか、メモとしても、知らせるためにも必要だったそうです。

出前保育もしながら6月に保育を再開した志津川保育園。保育園が流されてしまった子どもたちも合わせて100人弱(0歳児が少ない)が生活をしています。(8・11)避難所や親戚の家では落ち着かない、夜泣きなどで支援のいる子ほど、そこでの生活に困難が生じます。お母さんへの支援も必要です。そんな子どもたちに、すぐに戻っておいでといえる保育園の存在はとても大きいものです。

『食育』というけど、食べることで命をつなぐことを実感した。」と先生がおっしゃりました。学校給食を分けてもらって、パンと牛乳で過ごし、それでも食べられることがありがたい。プレハブのコンビニが再開して、やっとおにぎり。ありがたいけど、コンビニのおにぎりは味が同じで、毎日食べられるものではない…とお盆明けからおつゆを作れることになったそうです。それでも、食材が十分手に入らない、毎朝届けてもらえない、と問題は山積みようです。京都から食材の支援が少しでもできたらいいなあと感じました。

保育園には手作りクッキーと4・5歳からの絵のプレゼントをしてきました。

「見えるもの全て、全国からの支援です。ありがたいです。」とおっしゃる先生方。『当たり前やん！！支援するやん！！』と思いますが、その一つひとつに丁寧に感謝される姿勢に、また何も無いゼロから進む人間の力に感動しました。そして、目の前の子どもたちを必死に守ってくれたこと、これからも見放さないことに感謝します。

2日目からはホテル観洋にある託児所で過ごしました。海沿いだけど小高いところにあるホテルですが2階まで津波（引き波）が襲いました。ホテルの通りをはさんだ山手に託児所があります。ホテルで働く従業員の子どもたちが現在10人ほど過ごしていて、平日は志津川保育園や戸倉保育園に通い、休日はここに来る子どももいます。職員は4人で365日保育をされています。またホテル内にも託児所があり、宿泊される子どもも来るそうです。子どもたちを保育しながら全国から集まる支援物資を仕分けし、お礼の手紙も書いて…と目白押しの仕事です。私たちは支援物資の整理を中心にしてきました。初日はカラーボックスを作り（慣れないので、ちょっとガタガタでした。。）絵本を整理しました。2日目は保育室として部屋が使えるように、物資の仕分けと移動、部屋の掃除、3日目は給食室にある大量の保存食の整理（賞味期限・離乳食の月齢別にわけ）、最終日は写真の整理をしました。

「〇〇が欲しい」と発信すれば全国から集まるのですが、そこで欲しい時期と届く時期とにズレが生じてしまうことがよくわかりました。赤ちゃんにとってすぐ欲しい離乳食。ベビーフードが届くまで、待つてはいられません。とにかくうめぼし入りのおにぎりでのいでいたそうです。すると、届いたベビーフードでは、味が物足りない、月齢が大きくなっていく…ということで、せつかくの支援が…ということもなります。それでも、ありがたい！とベビーフードをカレーに足してみたり、10カ月までなら食べられる！と職員さんが食べたり、また次にやってくる小さい子が食べる、と無駄にはしていません。

仕分けの作業は本当に大変でした。一つの段ボールに、試供品の化粧品・おもちゃ・食器とバラバラに入っていたり、人形はありがたいけど、みんな裸んぼだったり、「むむむ〜」と考えてしまいました。それでも「腐らないものは使えるから。」「名前を書いて送ってほしい。お礼が言いたいから。」とおっしゃっていました。

物資はもちろん必要で私たちも気持ちを…となるのですが、それを仕分ける人手も必要だと実感し、これからむやみに送らず、欲しいものを確認してから送る必要があると思いました。

国や自治体がもっと早急に、現場の状況をつかみ、臨機応変に…ということができないことへのいら立ちも聞いてきました。ホテルに600人の避難者を収容してほしいと言われ、受け入れているのに、もらったトイレトペーパーは個人だからと2ロール…「こんな数では足りない！」と言ってもらえず…そんな時に大阪市が物資の送り先がなく困っているという話を聞き、直接送って欲しいと連絡したそうです。すると、行政からの支援

物資は行政を通さないといけないらしく、「勝手に大阪に連絡するな」と言われたそうです。平等に…という行政。いやいや待ってられません。しっかりしてほしいものです。物資に関しては本当に考えさせられました。

仕分けの合間に子どもたちと遊んでもきました。

京都から持っていった手作りおもちゃグッズで、びゅんびゅんごまを作りました。回るびゅんびゅんごまに感動して「つくりたい！！」「持って帰っていい？」とうれしそう。次の日には「きのう、れんしゅうしたよ。おふろにはいるまえに。」とってくれました。

そんな姿を見て、先生がホテルのロビーで工作コーナーしてみる？と提案してもらい、避難している小学生と交流もできました。バルーンやビーズ・けん玉・こまと作ってあそんで、ほっこりしてもらえたかな。私たちも楽しい時間でした。

いまでこそ無邪気に遊んで、笑っている子どもたちですが、職員さんから当時の話を聞くのは、本当につらかったです。逃げた神社は周り一面海になり、兄妹とお母さん・お父さんの身体を帯でぐるぐるまきにして木にくくりつけた。生きていることを伝えたくて、裸足で歩いてきてくれた。橋がなくなり、胸まで海に浸かりながらお迎えに来てくれるおじいちゃんがいた。いつまでもお母さんがお迎えに来なくて、夜泣きをしながら待っていた。

職員さんも4階のマンションの屋上で棒につかまり、腰までつかりながら子どもを抱いて生き延びた。家の2階だけが別の場所で見つかり、片付けに行かなければならなかった。実家は無事だったけど、祖父母が母に当たりまくり、母を支えなければならなかった。一人息子を避難所に置いたまま、託児所を離れられなかった。

4歳の男の子は「お母さんはホテルの3階でお茶のんでたときにつなみがきた。朝、お家に帰って泣いたんや。」「新しい車かった！」と話してくれました。自分が体験したことを自分の言葉で伝えるまで、受け止めきれしていないのかな？と感じながら「うん。うん。」としか言えませんでした。

また、小学生が「てっぼう！」とか「しぬ」という日常使ってみたくなる悪い言葉を発しているのも考えさせられます。私たちにも甘えたいのとストレスで、発してしまうのかな？と思いました。

13日はホテルの従業員である二十歳の方をお祝いしようというところから、友人を呼んで、サプライズ企画がされました。ケーキのデコレーションを一緒に行った栄養士さんに仕上げてもらい、パーティーにも参加させてもらいました。

成人式は1月ではなくお盆にやっているのが常のようですが、震災の影響で延期されました。そんな中、おかみさんの計らいで企画されました。浴衣姿の二十歳の成人が集まり、「これからの南三陸町の担い手として、期待している。」というお祝いの言葉に、『重過ぎる…』と感じた私です。でも、彼女たちは「震災を乗り越えていく仲間として、町の復興と未来をつくりあげて行くことが私たちの使命です」と誓いました。

町にとっても、日本にとっても心強い反面なあと思いましたが、目の前で自分の母親・

祖父・叔父・叔母が流された、家がなくなった新成人もいると聞きました。彼女たちの背景を知れば知るほど、つらかったです。

ホテル観洋には従業員が子育てしながらも働き続けられるように、託児所があり、このようなすてきな企画もあり、たくさんの方を必死で受け入れてくれていて、とても温かいホテルだと感じました。今でこそ、電気も水も食料もあり、宿泊していると、『観光にきた?!』かと思ってしまいました。

しかし、少し離れた町はなにもなく、がれきの山がありました。

家も線路も駅も病院もありません。

思い出も全て流されてしまいました。

でも、花が咲いていました。

道が少し整備され、車がたくさん走っていました。

笑い声が聞こえました。

人が生きていました。

京都にいとどうしても遠い出来事になってしまう震災です。

確かに、現場は悲惨で言葉になりません。

でも、そこで生きている人々の生きる力に感動し、強いものを感じました。

これから…どうしていくのか、

そこに私たちも向き合っていけないと思いました。

みんなで知恵を出し合って、遠くから支援し続けられたらいいなと思います。